The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アラブ文法学における[PP+NP]構文の分析の問題点
Author(s)	Soliman, Alaaeldin
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2011, 5, p. 187-204
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/12067
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アラブ文法学における［PP＋NP］構文の分析の問題点

SOLIMAN Alaaeldin *

Abstract:

Problems in the Analysis of the [PP+NP] Construction in Traditional Arabic Grammar

This paper focuses on the [PP+NP] construction, one type of the Existential Constructions in Arabic. The [PP+NP] construction in Arabic is treated in traditional Arabic grammar in relation with definiteness and dislocation. In this paper I address some problems in the analysis of the [PP+NP] construction in traditional Arabic grammar, and argue that the [PP+NP] construction is not restricted by definiteness condition, nor involves any kind of dislocation.

Keywords：Arabic traditional grammar, theory of government, mubtadaʔ, existential sentence, locational sentence

キーワード：アラブ文法学，作用論，先行名詞，存在文，所在文

0. はじめに

これまで，アラビア語[1]では，存在を表す［PP＋NP］構文（1）のNP「男」は，アラブ文法学ではmubtadaʔ〈先行名詞〉として扱われてきた。また，アラブ文法学と現代言語学の双方においてNPの非限定性と［PP＋NP］構文が関係づけられ，［PP＋NP］構文は所在を表す［NP＋PP］構文（2）の変形だと説明される。

1） fi　l-bait-i　rajul-u-n
　　に　Def-家-Gen　男-Nom-Indef
　　家に男がいる。

＊　カイロ大学文学部日本語日本文学科・助講師

1　本論では，方言を扱わない。ここで使う「アラビア語」は古典アラビア語・標準アラビア語と呼ばれるアラビア語の変種を意味する。通常，古典アラビア語は標準アラビア語と区別されるが，本論で取り上げる存在構文は両変種にあるので，あえて区別しない。

2）ʔar-rajul-u　fi-　l-bait-i
Def-男-Nom　に　Def-家-Gen
その男は家にいる。

しかし，アラブ文法学における mubtadaʔ〈先行名詞〉の定義は［PP＋NP］構文の NP に当てはまらない。NP の非限定性と［PP＋NP］構文の成立についての説明も妥当ではなく，NP は限定名詞句の場合にも［PP＋NP］構文は成立する。［PP＋NP］構文は，すでに知られている（＝限定されている）場所に存在する事物について述べ，文章・談話に初めてある事物を導入する時に使用される場合が多い構文なので，NP（＝存在する事物）は限定名詞句より非限定名詞として多く生起するだけであり，［PP＋NP］構文の NP の非限定性はこの構文の成立にとって必須的条件ではない。また，［PP＋NP］構文は存在という基本的な意味を表し，構造的にも所在を表す［NP＋PP］構文と異なり，［PP＋NP］構文を［NP＋PP］構文の変形だとする説明は適切ではない。

本論では，まず，1. でアラブ文法学における文法理論と構文の分析を概観し，2. では，Sībawaihi と ʔibn Hišām の［PP＋NP］構文に対する分析とその問題点を述べ，［PP＋NP］構文の NP が限定名詞の場合にも文が成立することを説明する。3. では，［PP＋NP］構文の説明に使用される mubtadaʔ〈先行名詞〉を点検し，これは性質の異なる広範囲な事象や機能を含むという問題点を説明する。4. では，［PP＋NP］構文の NP は限定名詞の場合にも文が成立することを示す。そして，本論の結論を 4. で述べる。

1．アラブ文法学

まず，アラビア語の言語研究一般について言えば，大きく二つの流れに分けることができる。正しいアラビア語を使うために文語の語尾変化を重視した 7 世紀から始まった伝統文法学の理論と，現代言語学の枠組みの中で行われている研究である。アラビア語の伝統文法学は 7 世紀から本格的に始まり，千年以上の歴史を持つ。それは 8 世紀から目覚しい発展を見せるが，アラビア語の文法研究の中核をなす理論と分析の手法は 11 世紀までに完成し，それ以降の研究は伝統文法学の成果にかかわる整理・解説と評価がほとんどである［Tammām1979: 11］。アラビア語の言語研究遺産に現代言語学に貢献できる数多い業績があることはいうまでもないが，概して伝統文法学は規範的・教育的な性格が濃く，また長いあいだ同じ理論的観点から研究が行われてきたので，「アラビア語の研究は焦げるほど熟した」（ʔan-naħw-u naḏaja ħattā ʔiħtaraq）と言われるとおり，爛熟はあっても新展開には乏しい。本論で扱う［PP＋NP］構文はその停滞を示す典型的な一例である。以下で見るように主流の学者の間では定着した説明が行われてきたが，この［PP＋NP］構文を他の構文と区別し，新しい見解を述べたのは 14 世紀の ʔibn Hišām（1309–1360）であった（詳細は 2. で述べる）。

以下の 1. 1 では，アラブ文法学の理論を概観し，1. 2 では，構文の分類と分析とその問題点を説明する。

1.1　アラブ文法学の文法理論

文法研究の始まりについては多くの異なった伝承があるが，たいていの学者は文法研究の始まりを ʔabu l-ʔaswad ʔad-duʔali（688 年没）に置いている。また，アラビア語伝統文法の最古の書物である Sībawaihi（793 年没）の *ʔal-kitāb*〈その本〉は 8 世紀の後半に成立したが，その規模・内容からみると Sībawaihi が一人で無からアラビア語の文法学の研究を始めたとは考えられず，伝統文法の本格的な始まりは，語り継がれているように，7 世紀の後半であったと考えて差し支えないと思われる。そのきっかけとなった理由としては，純粋に言語のあり方を記述するためであったというより，宗教的，政治的，社会的などの理由が考えられる［Versteegh 1997: 53，Tammām 2000: 23–28 など］。つまり，コーランで使用されたアラビア語の変種の一つ，クライシュ族のことばを「保護」・標準化する必要性からアラブ文法学研究が始まったのである。教育的・規範的な性格はその必然的な結果であり，アラビア語を話す人びとはまずコーランのアラビア語を手本とすべきであることが規定され，アラビア語話者がよく「間違える」語尾変化 ʔal-ʔiʕrāb が研究の中心をなした。

語尾変化の正しい使い方を説明するうえでは，伝統文法理論の骨格を成す naẓariyyatu l-ʕāmili〈作用論〉［Government Theory］が応用された。作用論の創始者または起源は確定できないが，Sībawaihi（793 年没）の *ʔal-kitāb*〈その本〉ではこれが統語分析の基本的な理論として存在している。古代ギリシャ哲学における因果論に影響を受けたと思われる作用論なくして伝統文法理論を語ることはできないので，ここで簡単にその考え方を概観する。その基本はおよそ次の 6 点にまとめることができる。

a）文中のある語は ʕamal〈作用〉Governance/ Operation によって他の語に働き，支配を受ける語に特定の格を割り当てる。支配する語を ʕāmil〈作用語〉Governor/ Operator と呼び，支配される語を maʕmūl〈被作用語〉と呼ぶ。したがって，名詞と動詞の ʔiʕrāb〈語尾変化〉は ʕāmil〈作用語〉の存在の証し・結果として理解される。

b）動詞，名詞，辞（例：前置詞）のそれぞれは ʕāmil〈作用語〉として機能することは可能であるが，その「支配の力」は異なり，動詞がもっとも強く，無標の ʕāmil〈作用語〉である。これに動詞のように振舞う ʔismu l-fāʕili〈動作主名詞〉（= 能動分詞），ʔismu l-mafʕūli〈被動作主名詞〉（= 受動分詞）などが続き，次に名詞を支配する辞がくる。

c）ʕāmil〈作用語〉の存在は絶対的であり，作用語は文中に語（動詞，前置詞など）として存在する ʕāmilun lafẓiyyun〈顕示的な作用語〉と，存在はしないが想定される作用語 ʕāmilun maʕnawiyyun〈抽象的な作用語〉，との二種類に分けられる。ʕāmil〈作用語〉の存在が必須不可欠であると主張した文法家は「強い顕示

的な作用語」である動詞で始まる VS（O）構文の説明には苦労しなかったが，名詞で始まる（3）のような文の作用語については意見が分かれ，文法学派の論争点の一つとなっている。

3） Zaid-un[2]　　ṭālib-u-n
ザイド-Nom.　学生.M.Sg-Nom-Indef
ザイドは学生だ。

この文の第一要素 Zaid の u（主格標示）と第二要素 ṭālib の u（主格標示）の生起について，バスラ学派は抽象的な作用語（ʔali-btidāʔ〈先行性〉）を設定し，それが「ザイド」（主部）に働いて，rafʿ「主格」を割り当てると考える。バスラ学派の大部分は「学生」（述部）の「主格」は，「ザイド」の働きによるものとしているが，ʔali-btidāʔ〈先行性〉の作用としている者もある。一方，クーファ学派は主部が述部を主格にし，逆に，述部は主部を主格にするとした［Šawqī 1968: 168］。

作用語を設定することは以下の（1. 2）で見るようにアラブ文法学における構文の分類，特に存在文の分析と深くかかわっているので，重要な点である。抽象的な作用語による説明を統語分析に導入したことは，naẓariyyatu l-ʿāmili〈作用論〉による多くの構文の分析を可能にしたが，その反面，構文の分析を複雑かつ恣意的にした。これは伝統文法における構文分析の抜け道といってもよく，アラブ文法学の最大の問題点の一つであると考えられる。

d） ʿāmil〈作用語〉は基本的に maʿmūl〈被作用語〉に先行する。

e） 一つの maʿmūl〈被作用語〉は一つの ʿāmil〈作用語〉の支配しか受けられない。これは ʔat-tanāzuʿu fi l-ʿamali〈作用における争い〉の規則と呼ばれる。例えば，以下の文（4）では，二つの動詞（= 作用語）が名詞（= 被作用語）に先行しており，被作用語は二つの動詞の中の一つの働きしか受けられないと説明される。この場合二つの動詞の間には ʿilāqatu tanāzuʿ〈争い関係〉がある。

4） raʔaitu　wa　samiʿtu　Zaid-an
見た.Sg.1　and　聞いた.Sg.1　ザイド-Acc
（私は）ザイドを見，声を聞いた

アラブ文法学の二大学派（クーファ学派とバスラ学派）はこの「争い関係」の発生につ

2　Zaid-u-n の n（nunation）は通常，普通名詞に生起した場合，非限定を表すが，（3）のように限定名詞の扱いをされる固有名詞にも現れる。この場合，Zaid-u-n は形態的に非限定であるが，意味的に限定名詞として理解される。混乱を避けるため，ここであえて，これらの固有名詞に Indef のグロスを付けない。

いては同じ意見であるが，どちらの動詞が働くかについては意見が異なる。クーファ学派は第一動詞が文頭にあるので，作用語として優先されるべきであると説明するが，バスラ学派は第二動詞は名詞に近いという理由で，作用語として第一動詞より優先されるべきと説明する［ʕabdallāh 1998: 382–383］。

他方，一つの ʕāmil〈作用語〉は一つ以上の maʕmūl〈被作用語〉に働きかけることができる。しかし，一つの ʕāmil〈作用語〉と二つの maʕmūl〈被作用語〉が存在している場合，もし被作用語の一つが作用域になければ当の被作用語に対して別の ʕāmil 作用語〉が想定される。これは ʔali-štiġāl〈占有〉規則と呼ばれる。

例えば，次の，（5.a）の ʔal-laban-u の u「主格」を説明する時，（c）規則を採用し，抽象的な作用語（ʔali-btidāʔ〈先行性〉）が先行名詞 ʔal-laban〈ミルク〉に働いて，「主格」を割り当てたと説明される。しかし，（5.b）のように「対格」で始まる文の場合には，被作用語に「主格」を割り当てる ʔali-btidāʔ〈先行性〉を採用することができず，次のような説明が採用される。作用語 šaribtu〈飲んだ .1〉は後続の三人称 hu に働いているので，先行名詞 ʔal-laba-na〈ミルク〉は作用語（動詞）の作用域外にある。この場合，作用域外の被作用語 ʔal-laban〈ミルク〉の前に šaribtu〈飲んだ .1〉と同じ作用語が想定され，（5）の構文は（6）の構造を持つと説明される。

5a） ʔal-laban-u　　šaribtu-hu
Def-ミルク-Nom　　飲んだ.1-Pron.3
Lit: ミルクは私がそれを飲んだ。　（意図された意味：ミルクは私が飲んだ）

b） ʔal-laban-a　　šaribtu-hu
Def-ミルク-Acc　　飲んだ.1-Pron.3
Lit: ミルクを私が飲んだ。（意図された意味：ミルクは（なら）飲んだ）

6） ［šaribtu］　ʔal-laban-a　　šaribtu-hu
飲んだ.1　　Def-ミルク-Acc　　飲んだ.1-Pron.3
Lit: 私がミルクを飲んだ，それを私が飲んだ。

f） 基本的に ʕāmil〈作用語〉と maʕmūl〈被作用語〉を分離してはならない（その間に他の語を入れない）が，動詞は「強い作用語」なので，分離可能である。辞とその maʕmūl〈被作用語〉は分離できない。

伝統アラビア語文法の用語体系がこの視点から組み立てられているだけでなく，当然ながら，さまざまの文法事象の記述と説明がこれらの前提から教条的に演繹される[3]。

3　たとえば用語においては，前置詞句における前置詞と名詞の名称である。前置詞は jārr〈ひく物〉，

記述・説明の基本となる支配の原理は，明らかに，VSO 言語であるアラビア語の基本構造から発想されており，その点では充分に記述的な妥当性がある。また偶然とはいえ，「動詞による項支配」という，現代の結合価理論（dependency theory; valence grammar）と同じ視点に当初から到達している点でも非常に興味深い。しかし，「支配語が先行する」，言いかえれば支配項はそれに後続する諸要素だけを支配域とする，という前提（＝d）はあまりに強力な，いわば理論的フィクションであり，また，この前提から導かれる「想定された支配語」（＝c と e）とは，簡単にいえば，説明上むりやり補われる先行要素を意味し，この箇所で文法記述の守るべき「言語事実への忠実性」という原則が破られていることは明白である。これから随所で見るように，規範性の弊害が，これら二項目を踏襲してきた点からおもに生じていることは，さまざまの事実に照らして明らかである。

1.2　アラブ文法学における構文の分類と分析

アラビア語文法学の主流の構文の分析では，構文が① jumlatun ʔismiyyatun〈名詞文〉と② jumlatun fiʕliyyatun〈動詞文〉との二種類に分けられる。「名詞文[4]」の典型的な構文は主格名詞で始まる［Ø　NP_{-Nom}＋Comp］構文（3）と，動詞を含み，主格名詞で始まる［NP_{-Nom}＋V（Comp）］（7）構文である。（便宜のためここで再掲する）

3）　Zaid-un　　ṭālib-u-n
　　ザイド-Nom　　学生-Nom-Indef
　　ザイドは学生だ。

7）　ʔal-bint-u　　l-jamīlat-u　　jāʔat
　　Def-女の子-Nom　　Def-きれい.F.Sg-Nom　　来た.F.3
　　そのきれいな女の子は来た。

名詞文は mubtadaʔ〈先行名詞〉（主部）と xabar〈新情報〉（述部）からなる。（3）の Zaid-un〈ザイド〉と（7）ʔal-bint-u〈その女の子〉は mubtadaʔ であり，ṭālib-un〈学生〉と jāʔat〈来た.F.3〉のそれぞれは xabar であると説明される。mubtadaʔ〈先行名詞〉は一つの単語からしか形成できないが，xabar〈新情報〉は以下の三種類に分けられる。

① xabaru mufradin〈一つの単語からなる新情報〉：（3）の ṭālib-un〈学生〉。
② xabaru šibhi jumlatin〈準文の新情報〉，：šibhu jumlatin〈準文〉は maʕa Muḥammad-in〈ムハンマドと共に〉のような前置詞句または，ʔamām-a l-bait-i〈家の前〉ように

前置詞の支配・働きを受ける名詞は majrūr〈ひかれる物〉と呼ばれる。

4　印欧諸語のような統語法をもつ言語においては，名詞的述部によって成立する文を動詞中心の文と区別して名詞的文（nominal sentence）と呼ぶが，アラビア語の伝統文法では，「名詞文」と呼ばれるのは，主格名詞で始まる文のみである。

名詞の前に場所を表す名詞（＝前，後ろなど）が来る場合をいう。
xabaru šibhi jumlatin〈準文の新情報〉は以下の［NP＋PP］構文（8.a）と［PP＋NP］構文（8.b, c）の下線部分である。

8a） ʔar-rajul-u　fi-　l-bait-i
Def-男-Nom　に　Def-家-Gen
Lit: その男，その家に。（意図された意味：その男は家にいる。）

b） ʔamām-a　l-bait-i　rajul-u-n
前　def-家-Gen　男-Nom-Indef
Lit: その家の前，男。（意図された意味：その家の前には男がいる）

c） ʕind-ī　saiyārat-u-n
所-Pron.1　車-Nom-Indef
Lit: 私の所（に）車。（私は車を所有している。）

③ xabaru jumlatin〈文からなる新情報〉。これは以下の二種類に分けられる。

A） xabaru jumlatin fiʕliyyatin〈動詞文からなる新情報〉：(7) の jāʔat〈来た.F.3〉。

7） ʔal-bint-u　l-jamīlat-u　jāʔat
Def-女の子-Nom　Def-きれい.F.Sg-Nom　来た.F.3
そのきれいな女の子は来た。

B） xabaru jumlatin ʕismiyyatin〈名詞文からなる新情報〉：(9)

9） ʔal-fīl-u　ʔanf-u-hu　ţawīl-u-n
def-象.M-Nom　その鼻-Nom-Pron.3.M　長い-Nom-Indef
象は鼻が長い。

この場合，ʔanf〈鼻〉は第二先行名詞と呼ばれ，第一先行名詞（＝ ʔal-fīl-u〈その象〉）と ţawīl〈長い〉は文の xabar を成すと説明される。(9) はいわゆる二重主語構文である。アラブ文法学に「二重主語構文」という用語はないが，「第一先行名詞」，「第二先行名詞」などを使い，この文の構造を正しく捉えていたと思われる。（アラビア語における二重主語構文については［Soliman 2009: 1–14］を参照）

他方，「動詞文」jumlatun fiʕliyyatun とは，アラビア語文法学では動詞で始まる［V NP(O)］(10)，あるいは，主格名詞でなく，「対格」名詞で始まる（5b）のような文を言う。

動詞文の主述関係を表すには fiʕl〈動詞〉と fāʕil〈動作主〉の一対が使用される。

10） jāʔati　　l-bint-u　　l-jamīlat-u
来た.F.Sg.3　Def-女の子.F.Sg-Nom　Def-きれい.F.Sg-Nom
そのきれいな女の子が来た。

5b） ʔal-laban-a　　šaribtu-hu
Def-ミルク.M.Sg-Acc　飲んだ.Sg.1-Pron.M.3
Lit: ミルクを私がそれを飲んだ。（意図された意味：ミルクを私が飲んだ）

Sībawaihi の時代から［V＋NP］構文の NP（＝主部）は［NP_1＋(VP/NP/PP)］構文の NP_1 と峻別され，前者は fāʕil〈動作主〉，後者は mubtadaʔ〈先行名詞〉と呼ばれるが，これは意味機能に目が届いている点で評価に値する。しかし，上記の（3）と（7）は成立条件の異なる構文であるにもかかわらず，同一構文として扱われる。（3）は繋辞，または動詞を含まない構文であり，主述関係は基本的に主部の限定と述部の非限定によって成立する［Soliman 2008: 26–31］。一方，（7）では，動詞が中核的な役割をなし，限定性は統語的な機能を持たない[5]。また，（7）は，（10）と同じ構成要素を含み，語順が相違するだけであるにもかかわらず，別の構文に属するとされる[6]。また fāʕil という用語は「動作主」という意味を表すが，現代言語学で意味上の役割を担う名詞の意味で使われておらず，統語的な役割を担う名詞（＝主語）を意味する用語である。また，mubtadaʔ〈先行名詞〉という用語も曖昧であり，言語分析における統語レベルと情報レベルの混同を露呈している。mubtadaʔ〈先行名詞〉の問題点を 3. で詳しく説明する。

このような構文の分類はいうまでもなく，上記（1. 1）の naẓariyyatu l-ʕāmili〈作用論〉に基づいており，作用語の種類によって構文が分類されている。つまり，ʔāmilun

5 「動詞文では，限定性は統語的な機能を持たない」と述べる意味は，動詞を含む文（7）の主部は，（7'）のように非限定の場合にも文は成立するが，動詞を含まない（3）の主部の限定は必須条件であり，（3'）のように主部を非限定名詞に変えると修飾構造になり，文として成立しないという意味である。非限定主部は，本論の 3. で扱う。
7'） bint-u-n　　jamīlat-u-n　　jāʔat
女の子.F.Sg-Nom-Indef　きれい.F.Sg-Nom.Indef　来た.F.Sg.3
きれいな女の子が来た。
3'） rajul-u-n　　ṭālib-u-n
男.M.Sg-Nom-Indef　学生.M.Sg-Nom-Indef
学生である男。

6 （10）と（7）は同じ内容を表しているが，情報構造が異なる。（10）は無標の基本語順（＝［V＋S］）であり，「その女の子が来た」という情報だけを表している。一方，（7）の主語（ʔal-bint-u〈その女の子〉は主題化によって，強調されており，文全体は対比の意味を示唆している。日本語においては，同じ機能が「が」と「は」の使い分けによって表される。
10） jāʔati　　l-bint-u　　l-jamīlat-u
来た.F.Sg.3　Def- 女の子.F.Sg-Nom　Def- きれい.F.Sg-Nom
そのきれいな女の子が来た。
7） ʔal-bint-u　　l-jamīlat-u　　jāʔat
Def- 女の子.F.Sg-Nom　Def- きれい.F.Sg-Nom　来た.F.Sg.3
そのきれいな女の子は来た。

lafẓiyyun〈顕示的な作用語〉で始まる文を「動詞文」，ʕāmilun maʕnawiyyun〈虚構的・抽象的な作用語〉で始まる文を「名詞文」，と規定しているのである。

アラブ文法学における基本構文の分類は上記のような問題点をかかえており，［NP＋V］構文（7）を名詞文として扱うことは適切ではないと指摘する研究［ʔal-maxzūmī 1986: 47，ʔal-mehirī 1994: 44］もあるが，それは，あくまでも統語記述を複雑にした作用論に対する批判，またはアラブ文法学を簡略するための工夫・提案であり，アラブ文法学の用語を使い，アラブ文法学の枠組みの中で，行われている指摘である。

アラブ文法学の構文分類では，前置詞句で始まる［PP＋NP］構文をも「名詞文」として扱うことが主流をなしているが，14 世紀の ʔibn Hišām はこの構文を jumlatun ẓarfiyyatun〈副詞文〉と呼んで，別立てにし，３分法を唱えた。次の 2. では，ʔibn Hišām と主流の分析との違いを取り上げる。

２．アラブ文法学における［PP＋NP］構文の分析

アラブ文法学における［PP＋NP］構文の説明はアラブ文法学の理論と分析のいくつかの深刻な問題点を露呈している。まず，第一に上でアラブ文法学理論の問題点としてきた「想定される作用語」が採用されており，第二に，この構文の mubtadaʔ〈先行名詞〉と説明される NP は，アラブ文法学における mubtadaʔ〈先行名詞〉の定義に収まらないという二つの問題点がある。mubtadaʔ〈先行名詞〉の問題点は 3. で説明する。

アラブ文法学の枠組みの中で行われた［PP＋NP］構文の説明は大別して，主流の学者の間で定着した Sībāwaihi の説明と，亜流とみなされる ʔibn Hišām の説明との二つに分けることができる。

Sībāwaihi をはじめとする主流の文法家は，［PP＋NP］構文が典型的な「名詞文」である［ϕ NP_1＋NP_2］構文と異なることを認めながら，なぜか独自の特性を持つ構文として扱わず，それに対して特別な名称を与えなかった。Sībawaihi は特に［PP＋NP］構文だけを単独で取り上げてはいないが，次例（11）の説明で［PP＋NP］構文に触れている。

11a） ʕabdu-llāh-i　　fī-hā　　qāʔim-a-n
アブド-Nomラーヒ-Gen　に-Pron.F.3　立っている.Parti-Acc-Indef
アブドッラーヒはそれの中で立っている。

b） fī-hā　　ʕabdu-llāh-i　　qāʔim-a-n
に-Pron.F.3　アブド-Nomラーヒ-Gen　立っている.Parti-Acc-Indef
それの中で，アブドッラーヒが立っている。

Sībāwaihi は（11.a）と（11.b）を区別しておらず二つの文における fī-hā〈それのなかで〉は ʕabdu-llāh-i の場所を特定するのみで，ʕabdu-llāh-i の属性を表す要素ではないと説明する。また，ʕabdu-llāh-i は mubtadaʔ〈先行名詞〉であり，ʔibtidāʔ の作用により主格が割

り当てられる。しかし（11.a）と（11.b）が統語上別物であるとは見なさず，双方を，仮想の動詞 ʔistaqarra〈定着する･存在する〉を補った文（12）によって説明し，qāʔim-an〈立っている .Parti〉は動詞 ʔistaqarra の ħāl〈状況語〉として an「対格」が割り当てられるのだと述べる。

（12）［ʔistaqarra］　ʕabdu-llāh-i　fī-hā　qāʔim-a-n
定着した.M.3　アブド-Nomラーヒ-Gen　に-Pron.F.3　立っている.Parti-Acc-Indef
それの中で，アブドッラーヒが立っている。

この説明から次のことが分かる。まず，① Sībawaihi は前置詞句 fī-hā と ʕabdu-llāh-i（＝［PP＋NP］構文）は属性関係を表していないという点に気付いているが，その一方で典型的な「名詞文」［ϕ NP_1＋NP_2］と同様に，「主格」が現れるのは ʔibtidāʔ によるものと説明している。②［PP＋NP］構文の前置詞句と名詞との関係を説明するために，仮想的作用語の考え方を導入し，（12）のように動詞の存在を想定したが，ʕabdu-llāh-i を fāʕil〈動作主〉ではなく，「名詞文」の記述に使用される mubtadaʔ〈先行名詞〉として扱っている。③情報構造が異なる［NP＋PP］構文（11.a）と［PP＋NP］構文（11.b）を区別せず，同じ構文として扱っている。

すなわち彼は，主部と述部との不一致，及び qāʔim-an〈立っている .Parti〉が「対格」をとるという二点を説明するために，存在しない動詞を想定したのである。また，この説明は作用論の中にも例外である。なぜかというと，通常，ʔibtidāʔ 以外の作用語の作用を受ける被作用語は主格であれば，fāʕil〈動作主〉，対格であれば，mafʕūl〈被動作主〉になると説明されるが，（12）では，ʕabdu-llāh-i は ʔistaqarra〈定着した〉の作用を受けているが，mubtadaʔ〈先行名詞〉のままである。

ʔibnu Hišāmi［1991（1309–1360）: 433］は基本構文を名詞で始まる① jumlatun ʔismiyyatun〈名詞文〉と，②動詞で始まる jumlatun fiʕliyyatun〈動詞文〉と，③前置詞句で始まる jumlatun ẓarfiyyatun〈副詞文〉との三種類に分け，３分法を唱えた。また彼は jumlatun ẓarfiyyatun（＝［PP＋NP］構文）の文頭に現れる前置詞句を作用語として認め，前置詞句が後続の名詞に主格を割り当てると述べた。また，主格名詞に対して mubtadaʔ〈先行名詞〉という用語を使わず，fāʕil〈動作主〉と呼んだ。

しかし ʔibnu Hišāmi の説は前置詞句を作用語と見なしたことと，［PP＋NP］構文の NP に対して fāʕil〈動作主〉という用語を与えた程度に終わっているので，後続の研究にさほど大きな影響を及ぼさなかった。ただ，彼が［PP＋NP］構文の NP を［ϕ NP_1＋NP_2］構文の NP_1（＝先行名詞）と峻別した点は，それまでの文法家と異なっており，事実の観察がより精密になっている点は評価に値する。しかし，いうまでもなく ʔibnu Hišāmi の分類も文の第一要素を重視するアラブ文法学の作用論に基づいている。

アラブ文法学は，文頭に現れる要素を重視しているという点では，明らかに，VSO 言

語であるアラビア語の基本構造から発想されている。その点では充分に記述的な妥当性がある。また，アラビア語の構文を「名詞文」と「動詞文」の二種類に分け，それぞれの主部に対して違う用語を使い，情報構造的に「名詞文」を分析しようとしたことは，高く評価できる。しかし，すべての言語事実を自らの理論に当てはめるために，実在しない動詞を想定し，文頭に現れる名詞を一律同様に扱い，動詞を含む文も「名詞文」として扱っている点は，アラブ文法学が抱えている大きな問題のひとつである。次の 3. では［PP＋NP］構文の NP の説明に使用される mubtadaʔ〈先行名詞〉を取り上げ，アラビア語の構文の記述におけるその有効性を検証する。

３．mubtadaʔ〈先行名詞〉の問題点

上記（1. 1）のようにアラビア語のアラブ文法学の最高目的は正しい語尾変化の使用であるので，文法の記述は形態論的な面を重視し，一つの構文が担う複数の意味，つまり，形態と意味または，形態と情報構造の記述は十分に行われていない。また形態という構文の一つのレベルにこだわるあまり，統語的レベルと意味的レベルの間の混同，または情報的レベルと統語的レベルの間の混同を来している面がある。この問題点がもっともはっきり現れているのは，アラブ文法学で使用される用語である。上記 1. 2 では，動詞文の説明に使用される fāʕil〈動作主〉という用語に触れたが，ここでは，［PP＋NP］構文の説明に使用される mubtadaʔ〈先行名詞〉の問題点について説明する。

上記のように「名詞文」1. 2 は，アラブ文法学では，mubtadaʔ〈先行名詞〉と xabar〈新情報〉との二つの要素からなるとされる。mubtadaʔ は文の主部であり，xabar は文の述部をなすと説明される。mubtadaʔ〈先行名詞〉という用語は Sībawaihi から現在に至るまでアラブ文法学の文の記述の基本的な用語であり，いうまでもなくアラブ文法学に根強く定着しており，管見では，この用語の妥当性・有効性が問われたことはない。しかし，アラブ文法学で mubtadaʔ〈先行名詞〉と見なされる対象を点検してみると，そこには現代言語学でいう「主題」，「焦点」，「新情報」，「旧情報」，などという広範囲な事象や機能が含まれており，具体性が低い。これを明らかにするために，まずアラブ文法学における mubtadaʔ〈先行名詞〉の定義を見ることにする。

かつて mubtadaʔ〈先行名詞〉が論争点とされたことはないので，どの定義も内容的には類似している。伝統文法における mubtadaʔ〈先行名詞〉の定義を以下の（15）にまとめる。

15a） mubtadaʔ〈先行名詞〉は「何かについて話す時の，その『何か』のこと」［ʔibn Hišām（2002［1309-1360］: 207）］。

b） mubtadaʔ は基本的に maʕrifa〈限定されている名詞〉であり，ʔismun marfūʕun〈主格で標示される名詞〉である。mubtadaʔ は基本的に限定名詞であるが，非限定名詞である場合もある。（mubtadaʔ が非限定の場合もあるという点に関して文法家は一致しているが，その種類についての見解は研究者によって異なる。

ʕabbās［1979: Vol, 1: 485–491］は，それらが 40 種類以上に上ると述べている。）

c） mubtadaʔ になるのは，ʔismun mufradun〈一つの単語からなる名詞〉のみであり，ʔaj-jārru wa l-majrūru（= 前置詞句）（例えば：fi..〈 .. には〉/ʔamām..〈 .. の前〉/ʕind〈.. の所〉）は mubtadaʔ にならない。

アラブ文法学では，次の（16–18）の例文の下線部分は mubtadaʔ として分析される。便宜上，動詞を含まない文における限定の mubtadaʔ（16），動詞を含む文における mubtadaʔ（17），そして非限定の mubtadaʔ（18）に分けて示す。

16a） Zaid-un ṭabīb-u-n
ザイド.M.-Nom 医者.M.Sg-Nom-Indef
ザイドは医者だ。

b） ʔanf-u l-fīl-i ṭawīl-u-n
鼻.M.Sg-Nom Def-象-Gen 長い.M-Nom-Indef
象の鼻は長い

c） ʔar-rajul-u ʔamām-a l-bait-i
Def-男.M.Sg-Nom 前-Acc Def-家-Gen
その男は家の前に（いる）。

d） ʔal-fīl-u ʔanf-u-hu ṭawīl-u-n
Def-象.M.Sg-Nom 鼻.M.Sg-Nom-Pron.M.Sg.3 長い.M-Nom-Indef
象は鼻が長い。

17a） Muħammad-un jāʔa
ムハンマド.M.-Nom 来た.M.Sg3
ムハンマドは来た。

b） Muħammad-un đaraba l-bint-a
ムハンマド.M.-Nom 殴った.3.M Def-女の子.F.Sg-Acc
ムハンマドはその女の子を殴った。

c） ʔal-bint-u đaraba-hā Muħammad-un
Def-女の子.F.Sg-Nom 殴った. M.Sg.3-Pron.3.Sg.F ムハンマド.M-Nom
その女の子はムハンマドが殴った。

18a） ʔamām-a　l-bait-i　rajul-u-n
前-Acc　Def-家.M.Sg-Gen　男.M.Sg-Nom-Indef
家の前には男がいる。

b） ʕind-ī　sayyārat-u-n
所-Pron.1　車.F.Sg-Nom-Indef
Lit: 私の所に車。（私は車を所有している。）

c） mā　ʕamal-u-n　bi-đāʔiʕ-i-n（ʕabbās 1979:Vol,1:486）
否定　行い.M.Sg-Nom-Indef　前置詞-無駄.M.Sg-Gen-Indef
無駄になる行いはない。

d） mā　rajul-u-n　fi-　l-bait-i（ʔibn Hišām1309-1360：209）
否定　男.M.Sg-Nom-Indef　に　Def-家.M.Sg-Gen
その家には男はいない。

e） man　munkir-u-n　hāðā（ʕabbās 1979: Vol, 1: 486）
誰　否定する人.M.Sg-Nom-Indef　これ.M
誰がこれを否定するか / できるか。

f） ʔa-rajul-u-n　qābala-ka　ʔami　mraʔat-u-n（Hussein 1998: 38）
疑問辞-男.M.Sg-Nom-Indef　会った.3.M-Pron.2.M　または　女性.F.Sg-Nom-Indef
あなたに会ったのは，男性ですか，女性ですか。

g） baṯal-u-n　fi-　l-maʕrakat-i（ʕabbās 1979: Vol, 1: 486）
英雄.M.Sg-Nom-Indef　に　Def-戦.F.Sg-Gen
（彼は）戦での英雄（である！ / がいる！）。

h） ʕuṣfūr-u-n　fi-　l-yad-i　xair-u-n　min　ʕuṣfūr-aini　ʕala　š-šajar-i
スズメ-Nom.M.Sg-Indef　に　Def-手.F.Sg-Gen　良い-Nom-Indef　より　スズメ-Dul.Gen　上　Def-木-Gen
手元にある一羽のスズメは木の上にある二羽のスズメより良い。

上記の mubtadaʔ の定義（15a）と（16–17）の例文だけを見れば，mubtadaʔ は旧情報を表し，現代言語学でいう「主題」（Topic）に相当する情報構造の用語だと判断したくなる。しかし，（18）の例文で mubtadaʔ として分析される NP を見れば，「主題」と同義であるという解釈は崩れる。（18a, b）のそれぞれは「何が / 誰が家の前にいるか」（18a），「何を持っているか」（18b）という質問に対する答えであり，mubtadaʔ として説明され

る NP は旧情報ではなく，新情報を表すからである。（18c-f）で mubtadaʔ とされる NP は，否定（18c, d），疑問（18e, f）の対象であり，いうまでもなく「主題」ではなく，焦点（Focus）[7] である。（18g）では，文の主部が省略されており，baṯal-u-n〈英雄〉は主述関係の述部の部分である。（18h）は諺であり，諺の文の特殊性を無視しても，文頭の ʕuṣfūr-u-n〈スズメ〉は「主題」ではなく，焦点として扱うほかない[8]。また，（17c）のように主題化によって文頭に現れる目的語も mubtadaʔ とされるので，mubtadaʔ は現代言語学でいう「主語」にならない。

また，アラブ文法学では，mubtadaʔu nakiratin〈非限定先行名詞〉は他の要素によって taxṣīṣ〈特定化〉，または，taʕmīm〈一般化〉されれば，非限定のまま文頭に使用できると説明され，次のような例があげられる。

19）	tālib-u-n	mujtahid-u-n	fi-	l-faṣl-i（Šawqī 1990:138）
	学生.M.Sg-Nom-Indef	勤勉.M.Sg-Nom-Indef	に	Def-教室.M.Sg-Gen
	教室に勤勉な学生がいる。			

20）	rajul-u-n	ṣaġīr-u-n	jāʔa（ʔibnu hišāmi 2002:209）
	男.M.Sg-Nom-Indef	小さい.M.Sg-Nom-Indef	来た.M.Sg.3
	小さい男が来た。		

伝統文法では（19–20）の文頭の名詞 tālib-un〈学生〉，rajul-un〈男〉は，非限定であるが，mujtahid-un〈勤勉〉，ṣaġīr-u-n〈小さい〉の存在によって特定されるため，このような構文が成立すると説明される。しかし，①（19–20）の tālib-un〈学生〉，rajul-un〈男〉は，旧情報ではなく，新情報なので，mubtadaʔ〈先行名詞〉の基本的な定義に入らない。②taxṣīṣ〈特定化〉，または，taʕmīm〈一般化〉さえあれば，文が成立するとは限らない。次の（21–22）から分かるように，（19-20）の述部 fi l-faṣl-i〈教室に〉，jāʔa〈（彼が）来た〉を zakiyy-un〈賢い〉，qawiyy-un〈強い〉という形容詞にすると，taxṣīṣ〈特定化〉があっても文は成立しない。

7　Lambrecht［1994: 206］では，文の焦点は「主題の位置に動かされた新情報である」と定義されている。

8　アラブ文法学では，mubtadaʔu nakiratin〈非限定先行名詞〉で始まる文の典型として諺からの例文がよく紹介される。しかし，諺は通常の文と違い，基本構文の研究または，文法の教材などで用例として取り上げるべきではない。通常の文の場合，話者が文の主部，または一部のみを言うだけでは，聞き手にその意味が伝わらない。しかし，①諺の場合，「噂をすれば，影がさす」と言わなくても，「噂をすれば」というだけで意図する意味が相手に伝わる。また，通常の文は隠喩を含む文を除いて，字義的に理解される。一方，②諺の多くは字義的には理解されない。この２つの理由で，諺は，基本構文の議論に用いるには適切ではなく，単語やイディオムなどと同列に辞書項目として扱うべきである。

21） tālib-u-n　mujtahid-u-n　zakiyy-u-n
学生.M.Sg-Nom-Indef　勤勉.M.Sg-Nom-Indef　賢い.M.Sg-Indef
勤勉で賢い学生

22） rajul-u-n　ṣaġīr-u-n　qawiyy-u-n
男.M.Sg-Nom-Indef　小さい.M.Sg-Nom-Indef　強い.M.Sg-Nom-Indef
小さくて強い男

上の（21–22）では，主部 tālib-un〈学生〉，rajul-un〈男〉は非限定であるため，後置の名詞（形容詞）の修飾を受け，修飾構造を成す。いうまでもなく，上記の（19–20）は次の（23–24）の倒置文であり，文頭の非限定名詞 tālib-un〈学生〉（19），rajul-un〈男〉（20）のそれぞれは，文の焦点である。また，（19–20）の文が成立するのは，taxṣīṣ〈特定化〉，または，taʕmīm〈一般化〉があるからではなく，述部「前置詞句」（19），「動詞」（20）は，主部 tālib-un mujtahid-un〈勤勉な学生〉，rajul-un ṣaġīr-un〈小さな男〉と修飾構造を成さないからである。

23） fi-　l-faṣl-i　tālib-u-n　mujtahid-u-n
に　Def-教室.M.Sg-Gen　学生.M.Sg-Nom-Indef　勤勉.M.Sg-Nom-Indef
教室に勤勉な学生がいる。

24） jāʔa　rajul-u-n　ṣaġīr-u-n
来た.M.Sg.3　男.M.Sg-Nom-Indef　小さい.M.Sg-Nom-Indef
小さい男が来た。

上記の説明から分かるようにアラブ文法学における mubtadaʔ〈先行名詞〉の定義は［PP＋NP］構文の NP に当てはまらず，mubtadaʔ〈先行名詞〉と見なされる対象には，現代言語学でいう「主題」，「焦点」，「新情報」，「旧情報」などという性質の異なる広範囲な事象や機能が含まれている。それ故，アラブ文法学における mubtadaʔ〈先行名詞〉という用語をアラビア語の構文の記述に使用することは妥当ではない。

４．［PP＋NP］構文における NP の限定性

アラブ文法学の文献では，［PP＋NP］構文は独自の構造を有する構文として扱われず，通常，xabaru šibhi jumlatin〈準文の新情報〉の説明と，mubtadaʔu nakiratin〈非限定先行名詞〉の説明と，ʔat-taqdīmu wa t-taʔxīru〈前置と後置〉との三箇所で取り上げられる。特に，mubtadaʔu nakiratin〈非限定先行名詞〉を説明する際，［PP＋NP］構文はその典型的な例として提示され，mubtadaʔ（=NP）は「非限定名詞の場合，この構文で使用される」［Šawqī 1990: 247 など］と説明される。これらの説明は，［PP＋NP］構文の

NP は常に非限定名詞であるという誤解を招きかねない。

［PP＋NP］構文は，既知の場所に存在する事物について述べ，文章・談話に初めてある事物を導入する時に使用される場合が多い構文なので，NP（＝存在する事物）は限定名詞句より非限定名詞として多く見られるだけであり，［PP＋NP］構文の NP の非限定性はこの構文において必須的条件ではない。例えば，「教室に誰がいるか」（25）という質問に対し，非限定名詞句の文（26.a）も限定名詞句の文（26.b）も容認される。

25） man　fi-　l-faṣl-i
誰　に　Def-教室-Gen
教室にだれがいるか。

26a） fi-　l-faṣl-i　ṭālib-u-n
に　Def-教室.M.Sg-Gen　学生.M.Sg-Nom-Indef
教室に学生がいる。

b） fi-　l-faṣl-i　ṭ-ṭālib-u　/　ṣadīq-ī　/　raʔīs-u　l-qism-i
に　Def-教室.M-Gen　Def-学生-Nom/　友達.M.Sg-Pron.1/　長.-Nom　Def-学科-Gen（学科長）
教室にその学生 / 私の友達 / 学科長がいる。

話し手が聞き手に「自分または聞き手が知らない学生が教室に存在する」ということを伝える場合に使用される。もし，話し手が教室にいる人を知っている場合，または，聞き手が教室にいる人を知っているという前提がある場合には，［PP＋Def-NP］構文（26.b）も問題なく成立する。いうまでもなく，（26a）は聞き手からの質問がなくても，文章・談話に初めてある事物を導入するために冒頭文として使用されるが，（26b）は通常，質問の答えとして使用される頻度が多い。

一方，所在を表す［NP＋PP］構文（27a, b）は既知の事物を説明の対象にし，その存在場所を語る。存在場所（＝前置詞句）は（非）限定にならなければならないという制限はない。

27a） ʔaṭ-ṭālib-u　fi-　l-faṣl-i
Def-学生.M.Sg-Nom　に　Def-教室.M.Sg-Gen
その学生は（その）教室にいる。

b） ʔaṭ-ṭālib-u　fī　miḥnat-i-n
Def-学生.M.Sg-Nom　に　試練/危機.F.Sg-Gen-Indef
その学生は危機に陥っている（困っている）。

また，［PP＋NP］構文（26）は［NP＋PP］構文（27）の変形ではなく，それぞれはその構文でしか表せない意味を持ち，情報構造的にも，統語的にも異なる。［PP＋NP］構文は存在場所について，［NP＋PP］構文は存在する事物について語る構文である。［PP＋NP］構文の PP（前置詞句）は，必須的に限定名詞または代名詞を含む。一方，［NP＋PP］構文の NP は必須的に限定名詞句である。

５．結論

アラブ文法学では，アラビア語の構文の分類・分析は naẓariyyatu l-ʕāmili〈作用論〉に基づいているが，その理論は規範的・教育的な性格が濃く，多くの問題を抱えている。作用論では，ʕāmil〈作用語〉の存在が必須不可欠であり，動詞を含まない文に実在しない動詞が想定され，文頭に現れる名詞が一律同様に扱われ，動詞を含む文も「名詞文」として扱われる。その結果，アラブ伝統文法の構文の分析には，統語的レベルと意味的レベルの間の混同，または情報的レベルと統語的レベルの間の混同が多く見られる。この問題点がもっともはっきり現れているのは，［PP＋NP］構文の分析とそれに使用される用語である。

本論では，［PP＋NP］構文の NP の説明に使用される mubtadaʔ〈先行名詞〉を取り上げ，アラブ文法学で mubtadaʔ〈先行名詞〉と見なされる対象を点検し，そこには現代言語学でいう「主題」，「焦点」，「新情報」，「旧情報」，などという広範囲な事象や機能が含まれていることを説明した。また，アラブ伝統文法では，文頭に現れる非限定名詞は mubtadaʔ と見なされ，その成立条件として taxṣīṣ〈特定化〉と taʕmīm〈一般化〉の存在と説明されるが，taxṣīṣ〈特定化〉と taʕmīm〈一般化〉の条件がみたされても，成立しない構文があることを示した。

最後に，［PP＋NP］構文の NP は限定の場合にも成立すると説明した。

＊　本稿の執筆に当たっては，東洋大学の山中桂一教授より，貴重なご指導，ご助言をいただきました。ここに深く感謝いたします。

ローマ字転写

ʔ	声門閉鎖音	b	有声両唇閉鎖音
t	無声歯歯茎閉鎖音	θ	無声歯摩擦音
j	有声歯茎硬口蓋破擦音	ħ	無声咽頭摩擦音
x	無声軟口蓋摩擦音	d	有声歯歯茎閉鎖音
ð	有声歯摩擦音	r	有声歯茎ふるえ音
z	有声歯歯茎摩擦音	s	無声歯歯茎摩擦音
š	無声歯茎硬口蓋摩擦音	ṣ	無声咽頭化歯歯茎摩擦音
ḍ	有声咽頭化歯歯茎閉鎖音	ṭ	無声咽頭化歯歯茎閉鎖音
ẓ	有声咽頭化歯摩擦音	ʕ	有声咽頭摩擦音
ġ	有声軟口蓋摩擦音	f	無声唇歯摩擦音

q	無声口蓋垂閉鎖音	k	無声軟口蓋閉鎖音
l	有声歯歯茎側音	m	有声両唇鼻音
n	有声歯歯茎鼻音	h	無声声門摩擦音

母音

a	低非円唇短母音	ā	低非円唇長母音
i	高前舌非円唇短母音	ī	高前舌非円唇長母音
u	高後舌円唇短母音	ū	高後舌円唇長母音

グロス

1	一人称	2	二人称	3	三人称		
Nom	主格	Acc	対格	Gen	属格	Pron	代名詞
M	男性	F	女性	Sg	単数	Plu	複数
NP	名詞句	Pred	述語	Def	限定辞	Indef	非限定辞
PP	前置詞句						

［参考文献］

ʕabdallāh Ṣāliḥ, 1998. *Dalīlu s-sāliki ʔilā ʔalfiyyati bni māliki,* Cairo; Dār l-muslim.

Al-tonsi, Kristen,B.& Mahmoud Al-Batal 2004. *Al-Kitaab fii Taʕallum al-ʕ Arabiyya,* Washington, D.C.; Georgetown University.

Anwar, M.S., 1979. *Be and Equational Sentences in Egyptian Colloquial Arabic*, Amsterdam; John Benjamins.

ʔaš-šāṭir, Muḥammad 1983. ʔal-mūjaz fi našʔati l-naḥwi, Maktabat l-kulliyāti ʔazhariyyati.

Ḥasan ʕabbās 1979. *ʔal-Naḥw ʔl-wāfī*, Vol.1., Cairo; Dār ʔal-maʕārif.

Hussein Abdil-Raof 1998. *Subject, Theme And Agent in Modern Standard Arabic*. Curzon.

Ibn Hišām, Al-anṣārī（Ibn Hišām 1309–1360), Muḥammad Muḥyī l-Din（ed), 2002. *šarḥ šuðūr al-ðahab*, Beirut; Al-maktaba Al-asriya.

Lambrecht, Knud.1994. *Information structure and sentence form: Topics, focus and the mental representations of discourse referents*. Cambridge University press.

ʔal-maxzūmī Mahdi 1986. *fi l-naḥwi l-arabī naqd wa tawjīh*, Lebanon; Dāru r-raīd al-arabī.

ʔal-mehirī 1994. *nazarāt fi l-turath lughawī l-arabī*, Tunisia; Jāmiat tunis li-ādāb wal-funūn.

Šawqī, Daif 1968. *ʔal-madāris ʔal-naḥwiya,* Cairo; Dār ʔal-maʕārif.

Šawqī, Daif 1991. *tajdīdu l-naḥwi*, Cairo; Dāru l-maʕārifi.

Soliman, Alaaeldin, 2008「標準アラビア語における繋辞（コピュラ）の欠如について―分離人称代名詞の機能―」, 東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻『言語情報科学』第 6 号, 東京, pp. 19–38.

Soliman, Alaaeldin, 2009「標準アラビア語の二重主語構文―ゼロ繋辞文を中心に―」東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻『言語情報科学』第 7 号, 東京, pp. 1–14.

Tammām Ḥassān 2000. *ʔal-ʔuṣūl,* Cairo; ʕālam l-kutub, pp. 23–28.

Versteegh, K., 2001. *The Arabic Language,* Edinburgh University Press.

（2011. 01. 07 受理）